

大正期の欧州経済史学と「福田学派」

土 肥 恒 之

はじめに

明治日本における「西欧化」、つまりヨーロッパ文明の導入にさいして欧米諸国からの専門家、所謂お雇い外国人が果たした役割については、改めて述べるまでもない。彼らはさまざまな分野で指導者として働き、日本人と交流することで、先進的な欧米文明を直接伝えたのである。最近の研究によると、明治時代に政府の仕事に携わっていた外国人は「控え目に推定しても」約1500-2000人とされるが(バークス 1990)、帝国大学をはじめとして開設されたばかりの高等教育機関で中心となったのも彼らお雇い外国人であった。だが彼らは文部省の乏しい予算を圧迫するほどの高価な人材であり、政府派遣の留学生の帰国とともに、彼らが外国人に代わってポストを埋めたのは当然の成り行きであった。こうして「西欧化」の第二期が始まるわけだが、新たに教壇に立った日本人の教授たちは欧米で師事した先生たちの学問を祖述した。人によってさまざまな工夫がこらされたにしても、それ以外に術はなかったのであり、「輸入学問」が日本の諸科学の基本性格となったのである。

この傾向は人文・社会科学に著しかった。例えば「西洋史学」である。かつて山中謙二が指摘したように、ヨーロッパの歴史に対する関心は、とりあえずは本場の著作を直輸入して語学に堪能な学者がよい翻訳を出すことで満たしうるものであった。なにも日本人の研究者の独創的な見解を必要としなかったし、また必要とされてもヨーロッパの学者と同じ土俵で取り組むだけの基盤はなかったのである(山中 1932)。同じことは出自こそ異なるが「欧州経済史学」についても当

てはまる。けれども同時にそうした「翻訳学問」からの脱皮も真剣に模索されたことも忘れてはならないだろう。小稿は大正期の代表的な経済学者である福田徳三、とりわけ彼の学派による欧州経済史研究への取り組みとその貢献について明らかにしようとしたものだが、あらかじめ「経済史家」としての福田について、簡単に整理しておこう。

福田徳三は明治7年(1874)東京に生まれた。親の希望に反して「徳」に欠けるところはあったが、語学に優れた才能を持っていた。彼の関心は経済理論、経済政策、経済学史、経済史、社会政策など経済学全般に及んでおり、しかもいずれの分野においても重要な礎石を置いたのである。「すべては福田に始まる」といわれる所以だが、それだけではない。切れ味のよい文章と該博な知識によって青年学徒に与えた影響はすこぶる大きなものがあった。彼は明治34年(1901)9月に三年間の留学から帰国してから亡くなる昭和5年(1930)まではほぼ30年間にわたって母校である東京高等商業学校(1920年から商科大学)そして慶応義塾大学(1905-1918)の教壇に立ち、その間に多くの優れた経済学者を育てた。ここでその名前を挙げることは省略するが、仮にそれを「学派」と呼ぶと、「福田学派」は日本の経済学界に大きな足跡を残したのであり、明治末期・大正・昭和初期の経済学は、後にマルクス主義経済学者となった河上肇とともに、福田の存在を抜きに語る事が出来ないのである。

では福田徳三の経済学のなかで「経済史」は如何なる位置を占めるのだろうか。この問題の答えはすでに出ている。彼は三年間の留学中、特にミュンヘン大学の歴史派経済学者のブレンターノ教授(L. Brentano, 1844-1931)に師事し、彼の薦めでドイツ語で『日本経済史論』(Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan, 1900)を著した。彼が26歳のときであり、日本の社会経済史学において特筆される出来事であった。また高商・商大と慶応の講義ではしばしば「経済史」を担当していたことが知られている。したがって経済史の教育研究もまた彼が強い関心を抱いていたわけだが、帰国後の福田には自ら纏めた著作集を見ても個々の短い解説や辞典項目はあっても、西洋日本を問わず纏まった経済史研究と呼ぶべきものはない。晩年の著作『唯物史観経済史出立点の再吟

味』は唯一まとまったものだが、これは経済史というよりも、むしろ学説史的研究と言うべきだろう。他方で福田の直接間接の影響の下に経済史研究に従事したものは少なくなかった。以下では彼ら「福田学派」による欧州経済史研究の取り組みを見ることになるが、具体的には東京高商での門弟の坂西由蔵と上田貞次郎、慶応義塾の阿部秀助と野村兼太郎の四人を取り上げることにしたい。

I 坂西由蔵と上田貞次郎

坂西由蔵(1877-1943)は兵庫県の生まれで、1901年に東京高等商業学校に入学し、専攻部貿易科を卒業した。卒業とともに神戸高商の講師として赴任するが、彼の生涯において福田との出会いは決定的なものであった。この点については多くの証言がある。周知のように彼は福田のドイツ語の著書を『日本経済史論』として翻訳・刊行したが(1904)、福田の師ブレンターノは、坂西の師でもあった。彼は文部省留学生として明治39年(1906)10月から43年6月まで「商業史及び商業学」の研究のためにドイツに滞在するが、主としてミュンヘン大学のブレンターノの下で研鑽を積んだのである。したがって彼の専門も福田と大きく重なるが、その後の福田が理論的方向に傾斜したのに対して、坂西は企業論・社会政策論についても考察を進めながら、経済史についての関心を持続したのである。

坂西は大正14年(1925)に『経済生活の歴史的考察』を刊行した。序にあるように、本書は彼の21年間におよぶ「在職の記念」なのだが、退官したわけではない。眼疾のために教授の職を辞するという区切りの意味での刊行であった。(その後は講師として教育に当たった)。『歴史的考察』は「経済生活発達の過程と経済自由の精神」「古代ローマ及び中世ドイツの大土地所有制」「近世工業国の問題」「価格生活概論」に大別されている。講演記録が多く、その他福田が編纂した『経済大辞典』のために書いた幾つかの項目が収録されている。ほとんどが欧州経済史に関連したもので、古代から現代までのさまざまなトピックが取り上げられているが、救貧制度や慈善の歴史についての関心が強いという以外は、何か一貫したものがあるとは言い難い。

次いで昭和8年(1933)、坂西は改造社版のB5版の「経済学全集」のシリー

ズの一冊として出された『世界経済史』に「中世ヨーロッパ経済史」を発表した。彼の他には田崎仁義が「古代支那経済史」、武藤長蔵が「日英交通史」を書いているが、いずれも福田門下である。このとき福田はすでに亡き人であったが、彼の推薦があったものと推測される。坂西の「中世ヨーロッパ経済史」は150ページの大部のものだが、その成り立ちについて次のように述べている。「私は旧神戸高等商業学校及び神戸商業大学において、多年経済史の講義を担当しました。この講義において私はかつてルヨ・ブレンターノ先生から学べるところを祖述し、その間微力の及ぶ限り諸書を参考にして師説をたしかめ、これを補習し、かつ自己の見解をこれに加ふることをつとめました」。つまり本書の原型は講義録で、「参考書」にはブレンターノ以外の多くの専門書が挙げられているが、本位田祥男・徳増栄太郎など日本の欧州経済史家の概説書などもある。ここでそうした著書との異同を細かく比較検討する余裕はないが、よく纏まっているように思う。本書は福田・ブレンターノを通して欧州経済史を学んだ坂西の「ひとつの総括」であった。

誰もが認めるように、坂西は福田の最も信頼する高弟であった。師弟関係をものがたる一つのエピソードを紹介しておこう。坂西は失明のために教授職を辞したが、その後任となった宮下孝吉（1901-1971）は、神戸高商で「坂西の薫陶を受けて」東京商科大学に入学した。そして福田のゼミナールに入り、欧州経済史特に中世都市史を専攻した。宮下の思い出によると、神戸高商に勤めてから間もない頃、旅行帰りの福田夫妻が神戸に立ち寄った。彼は坂西夫妻とともに大阪の梅田辺りの料理屋で福田と昼飯をとったのだが、「その席上、どういう機因であったか、先生は坂西先生を非常に厳しく叱られ、坂西先生はただ黙々としてきいておられました。私には意外と思われた場面でありましたが、これも要するに弟子を愛する心情の発露であったと思います」（宮下 1960）。師弟とはいえ二人は三歳しか違わず、しかも共に五十を越えた年齢であったことを思うと尚更である。

上田貞次郎（1879-1940）もまた福田の強い影響下で経済学を学びはじめた。明治35年（1902）の卒業に際して提出した学士論文「外国貿易論」が福田の眼に

止まり、彼の薦めで高商講師となったのである。そればかりではない。住まいも福田宅の近くに定め、ドイツ語の学習も兼ねて一緒に当時欧州の大学で広く読まれていたフィリップヴィチの経済学原理を輪読した。また福田の経済史の授業にも出て、主としてカール・ビュッヒャーの発展段階説をたたき込まれたという。だが1904年9月師弟の関係は突然断ち切られた。福田と校長との喧嘩に始まる「福田教授休職事件」の際に鎌倉に閑居していた福田は、はるばる訪ねてきた上田を「校長のスパイ」として殴った。福田の誤解だが、破門されたと思った上田はこれを契機に師のもとを離れてしまったのである。口喧嘩でさえ、生涯気まずいことはよくある。まして殴られたのだから、破門されたと思っても致し方ない。だが上田はあくまで冷静で常識的な人であった。昭和5年に福田が亡くなったとき、上田が書いた追悼文には次のような一節がある。「私は元来学者などになる気は少しもなく、況や教師などは馬鹿のする職業位に考えていたので、福田先生から勧められて学校に残った当座は中々一生涯教師で暮すつもりはなかったのですが、先生の学を好むこと熱烈であるのに引かされて、自分も多少勉強するようになりました。実に先生の功績の一半は其天稟の語学の才能を用いて盛んに西洋最新の学説を絶えず紹介された所にあるが、其一半は先生自ら率先して研究に熱中すると共に後進をして同じく研究せしめた所にあると思います」(上田 1930)。学者として教師としての福田の魅力を的確に評したものである。

上田のその後30年以上に及ぶ研究は『上田貞次郎著作集』全七巻(1975-1976)として整理されているが、中心は「経営経済学」「株式会社論」「貿易関税問題」など現代の経済経営問題を扱ったものである。そのなかで第三巻だけは「産業革命」として彼の欧州経済史研究が収められている。大正12年(1923)に出した『英国産業革命史論』と翌年の論文集『産業革命史研究』である。現代の経済経営分析を専らとしていた上田が、何故こうした問題に関心を持つに至ったのか。『英国産業革命史論』の序によると、その切っ掛けは第一次大戦後の1920年に開催された第一回国際労働会議へ出席し、「思想界の紛糾を眼前に見て深く考慮した」ことにあるという。明言されていないが、「思想界の紛糾」には1917年のロシア革命が影を落としていたのである。その成り行きを見定めるために、「英国

の産業革命及び之に次いで起れる新実業階級及び新労働階級の歴史を且研究し、且講義することを始めた」、というわけである。彼が担当していたのは「経済史」ではなく、「商工経営」だが、その教場で大正9年から三年にわたってイギリス産業革命史が講義されたのである。執筆に至る事情と内容については門下生の猪谷善一の詳しい解説（上田 1979）があるが、この新しい課題にはある確かな手がかりがあったようだ。

上田は「福田事件」後間もない明治38（1905）年9月から42年1月までヨーロッパに留学した。留学先として最初に選んだのはイギリスのバーミンガム大学の経済史教授のアシュリー（W. J. Ashley, 1860-1927）であった。西沢保によると、ハーバード大学での9年間の生活を終えて、1901年秋バーミンガム大学の新しい商学部の教授として赴任したアシュリーはブレンターノ、セリグマンとも交流があった。1900年の論文集のなかで、彼は「いかにして歴史家の精神を経済学者の著作にもちこみ、また経済学的な興味を歴史家の著作にもちこむかということをも身をもって示した」歴史派経済学者グスタフ・シュモラー（1838-1917）に感謝の言葉を記したが、イギリスにおける経済史学の基礎を据えたのはアシュリーその人であった（西沢 1991）。上田の留学は互いの思惑の違いもあって7カ月という比較的短い期間で終わったが、アシュリーの学問に対する彼の傾倒はその後も変わることはなかった。山中篤太郎によると、「先生においても、第一回留学の際あまり好遇されなかったにもかかわらず、アッシュレー教授の大きな肖像写真が先生の書斎をかざっていたほどその研究にひかれていた。」（山中 1965）また昭和5年にアシュリーの『英国経済組織の史的考察』（The Economic Organization of England. 1914）を翻訳・出版した横浜高商の徳増栄次郎によると、「この原書に初めて接したのは大正6,7年頃東京高商専攻部の学生として上田貞次郎先生のゼミナールに於いてであった。その学風のアッシュレー教授を偲ばしめる先生がこの原書を用いて造詣の深い英国社会経済史の知識を展開せられ更に日本の経済事象と比較論述された名講義は、一橋に於ける一偉彩であった」、と回顧している（アッシュレー 1939）。こうして師アシュリーのイギリス経済史像が上田の『英国産業革命史』の土台を支えていたと推測されるわけだが、加え

てアシュリーの師が先駆的かつ古典的な研究である『18世紀におけるイギリスの産業革命』を著したアーノルド・トインビーであった。

最初の留学はある意味で決定的なものがある。上田はバーミンガム大学からマンチェスター大学へ、更にドイツに渡ってボン、ベルリン、更にはチューリヒへと大学をわたり歩いた。ベルリン大学では「長身粗服、髪黒く顔長く一見して深遠なる思想家、しかも現代社会に満足せざる人」ゾムバルト教授の講義も聞いている。だがどれも上田にバーミンガム大学のアシュリー教授ほどの強い影響を及ぼすことはなかったようだ。上田の『英国産業革命史論』はわが国における産業革命のパイオニア的研究であった。

II 阿部秀助と野村兼太郎

阿部秀助は明治9年(1877)の生まれである。生地は福岡だが、山口の中学、高校を出て、明治33年(1900)に東京帝国大学文科大学史学科に入学した。大学時代についてはほとんど知られていないが、この頃史学科の主任教授はドイツ人のルートヴィヒ・リース(Ludwig Riess, 1861-1929)であった。明治20年の来日から15年間にわたって本場ドイツの歴史学の導入のために学生の指導とともに史学会の創設に当たった。そのリースとの出会いは後に阿部の学問と生活に強い影響を与えるのだが、ここでは先を急ぐことにしよう。卒業後は明治議會中学、読売新聞社、さらに法政大学に勤務するも、明治38年(1905)7月に召集令を受けて日露戦争のために半年間出征している。帰還して一年後の明治40年(1907)、彼は幸いにして慶応義塾に就職するが、これには福田の推薦があったという。つまり福田は先の事件の後の明治38年に義塾に招かれていた。「当時学交を訂することの密なりし福田徳三教授の賞賛措かざる辞」が阿部の就職にプラスに働いたというのが事の真相のようだ(高木 1925)。阿部はまず大学予科で地理学、歴史学を講ずることとなり、後に本科でも経済史、経済学史を担当することになった。その間の事情についていまだ少し踏み込んで述べておこう。

慶応義塾に大学部が設置されたのは明治23年(1890)のことであり、文学科、法律科とともに理財科(1920年経済学部)に改称)が置かれた。西川俊作によると、

大学の主任教師は3学科ともアメリカ人であり、理財科の場合はドロップパーズ (G. Droppers, 1860-1927) であった。つまり経済原理、経済史、財政論などの主要な科目はすべてドロップパーズの担当であった。彼は9年間に在籍するが、その後任もアメリカ人のヴィッカーズ (E.H. Vickers, 1869-1958) で、帰国までの11年間重要科目のほとんどすべてを担当した。こうして理財科は最初の20年間、経済学教育の多くを外国人教師に委ねざるを得なかったのである (西川 1990)。因みにドロップパーズはハーバード大学の「理財科」に入り、ドイツのベルリン大学に留学した。そこで歴史学派の巨匠アドルフ・ワーグナーのゼミナールに出席するという「最高の名誉」に恵まれたというが (西川 1983)、ドイツ留学はアメリカでもたいそう盛んであった。ある調査によると、1873-1905年にアメリカ人経済学者及び社会学者116名のうち、59名がドイツで研究し、うち20名が博士号を取得した。また多くのものが歴史学派、科学的・歴史的方法から強い影響を受けたと答えたという。1885年にアメリカ経済学会を創設したR.T. イーリー、J. B. クラーク、E.R.A. セリグマンなどはいずれもドイツ留学を経験しており、ドイツ社会政策学会が学会のモデルとなったことなど、日本とよく似た経緯を辿っている (田中 1993)。

だが慶応ではこの間、自前の教師の養成のために留学生の派遣が始まっていた。堀江帰一、名取和作、気賀勘重らがそれであり、『慶応義塾百年史』は留学から帰国した彼らが教壇に立った明治36年 (1903) をもって、「義塾は真の意味で独立の方向へ第一歩を踏み出した」と意義づけている。つまりヴィッカーズに代わるべき外国人教師が赴任していたにも拘わらず、彼らはもはや脇役に留まることになったのである。明治38年に義塾に招かれた福田徳三は、帰国した堀江、気賀らと共に明治42年『三田学会雑誌』を創刊した。阿部秀助が義塾に入ったのは、そうした日本人教師の充実、教課内容の拡充期であった。

阿部は義塾のスタッフに加わって3年後の明治43年 (1910)、海外留学を命ぜられた。研究主題は「企業の見地より観たる中世史及び近世史」であった。年齢は34歳だから、当時としては決して若くはなかった。またそれまでに発表された彼の「論文」のタイトルを見ると、かなりのバラツキがある。「中世における資

本的企業の史的発展」「宗教改革と資本主義」という「論文」が書かれてはいるが、ほとんどゼロからの再出発と見ることが出来るだろう。彼はベルリン大学の歴史派経済学の巨匠グスタフ・シュモラーに師事するが、ベルリン高等商業学校のゾムバルト教授の経済史の講義をも聴講したという。その年十月末の手紙で、阿部は次のように留学の心意気を述べている。「日本の如き新進の學術国において必要なるは戦場の功名者にあらずして寧ろ戦場の犠牲者に有之候。不肖、小生が如きもの既に日露の戦役において死す可き身なり。余命を今日に全ふするはこれ天の賜なり。余は此一事を回想する毎に、感慨の念胸に充つるを覚ゆ。希くは余命のあらん限り、日本における着実な史風の犠牲者となり、後援者となって研究に従事致度候」(高木 1925)。留学初期の情熱がよく示された手紙であるが、「特に深き印象を受けしはゾムバルト教授」であったとも記されている。その後阿部は一年半にわたって研鑽を続けたのち、南ドイツ、イタリア、イギリス、アメリカを経て明治45年(1912)7月帰朝した。間もなく、時代は明治から大正へ変わった。

大正2年から十年余り、阿部は毎年のように『三田学会雑誌』を中心として『史学雑誌』『歴史地理』『大民』などの雑誌に多くの「論文」を発表している。「時評」に類したのも少なくないが、比較的大きなものだけ挙げると、「三十年戦争の影響如何」「シベリアの経済的意義」「近世経済史上の企業家の地位」「芸術と経済」「講壇社会主義」「近世資本主義起源考」「近世資本主義起源考続論」「近世資本主義と殖民経済」などである。著書としては『近世商業史』391頁があるが、これは時事新報出版部の「慶応義塾経済学講義」の一冊で、刊行年は不明である。阿部は積年の研究対象である「近世資本主義史の研究」を纏めるつもりがあったようだが、病のために世に出ることはなかった。その他にランケ著『欧州近世史』の訳書が大正12年(1923)に出ている。教師としての阿部は理財科、そして経済学部で近世経済史、ドイツ経済学説、ドイツ語などを担当する他に、文学部でも西洋史、地理学、史学研究法などを教授した。

その他阿部は大正9年から弁論部部長として三田演説会で弁舌を振るい、また夏季には学生を率いて地方各地を講演した。福田が吉野作造らとともに「黎明

会」を結成して演説会を催したことは「大正デモクラシー」の教科書には欠かさない一章であるが、その多彩な講師陣のなかに阿部も名前を連ねていた。学生の頃から彼を知っていたリースによると、阿部は「初期の静かな瞑想的な性質の背後にそんなものが果たしてあったかと誰しも思いも及ばなかったような力強い雄弁の才に恵まれていた」（金井・吉見 1978）。だが大正11年末から健康が優れず、病に伏す日が多くなった。白血病であった。晩年の阿部は「精神療法に赴き、終に大本教に帰依して、綾部で長逝した」、という。大正14年（1925）1月のことであり、享年49歳であった。

以上のように、阿部は慶応義塾における「欧州経済史学」の最初の専門的な担当者だが、恐らく日本でも最初の一人であった。彼の「論文」は、もとより「翻訳史学」、つまり専門書の紹介・翻案の域を出るものではなく、そういう意味で「日本における史風の犠牲者」と言うことも出来る。だが阿部のなかにはもう一つの問題が潜在していたように思われる。それは専門としたドイツ史学における「政治史学」と「経済史学」の対立という根本問題である。この点について簡単に触れておこう。

阿部は文科大学の学生のときから歴史の経済史的把握に強い関心を示していた。明治36年の『史学雑誌』には徳川家康の「メルカンチリズム」を論じた論文が掲載されている。河上肇とも親交があり、彼が訳したセリグマンの『「新史観」歴史の経済的説明』に序文を寄せている。因みに河上とは同郷で、河上也大学院での研究テーマは「経済史、特に近世経済政策史」であった。明治38年度の東京専門学校講義録には阿部の「ドイツ史学史」があり、その大半はセリグマンの所説の紹介にあてられている（高村 1960）。そして彼が留学に選んだのもベルリン大学のシュモラー教授であり、最も共感したのはベルリン高商のゾムバルト教授（1863-1941）の講義であった。ゾムバルトは周知のように1902年に話題作『近代資本主義』を刊行したが、阿部は帰国後「資本主義の起源」を中心に多くの論文を書いていることも、すでに紹介した通りである。「経済史」「歴史派経済学」に対する彼の学問的な関心は一貫しており、この点に疑いをさしはさむ余地はないだろう。

他方で文科大学史学科で学び、卒業した阿部と教官たちとの関係あるいは影響についてはどうだろうか。史学科には明治24年(1891)に4年間の留学から帰った坪井九馬三(1858-1936)がおり、西洋史を担当していた。どちらかと言えば変人だが、彼は史学会で「史学と経済との関係」について講演し、その文章は先の河上の訳書に付録として掲載されている。つまり坪井もまた新しい「経済史」に関心を示していたと推測されるが、先任の教授であるルートヴィヒ・リースは「経済史」には全く理解がなかった。それどころか「冷笑的な発言」をしていたという。西川洋一によると、ドイツ近代史学の主流のなかで育ったリースは「歴史学を、なによりも個性性と歴史的個性を動因とする政治史として把握していた」。「ランケの衣鉢を継ぎ、その理想主義的歴史把握と世界史への志向を持ち続けた歴史家」リースは、「経済史」だけでなく、新しい「文化史」に対しても「もっぱら否定的ないし嘲笑的態度を示すのみであった」(西川 2002, 2003)。政治史偏重はドイツ史学だけの特徴ではないが、ドイツでは特に著しいものがあった。ユルゲン・コッカによると、「第一次世界大戦とその結末は、『戦争責任問題』という政治的理由から、政治史への集中化を過度にもちらすことになったし、多面では西欧の社会科学の潮流に対して頑として背を向けさせることにもつながった」。コッカはこれを「ドイツ歴史学の狭隘化」と呼んでいる(コッカ 2000)。

学者間の歴史観、方法論の対立というだけであれば、史学科の学生にとって特に問題はないだろう。だが阿部の場合、もう一つの個人的な事情が加わることになる。周知のようにリースは来日間もなく日本人の大塚ふくと結婚して男一人、女四人の子供をもうけたが、明治35年のドイツへの帰国に際して男子の応登(オットー)だけを伴った。夫人と娘たちを日本に残していったわけだが、明治40年(1907)阿部は慶応に就職すると同時にリースの長女と結婚したのである。つまりリースの娘婿となったわけで、彼のベルリン留学(1910-12)に際してはリースの世話を受けた。これもごく自然のことだが、リースは帰国後ベルリン大学で「私講師」、「非官吏身分の助教授」として伝統的な「政治史」を講義していたのに対して、阿部はリースの評価の外にあったシュモラーの新しい「経済史」

の講義を聴き、そしてゾムバルトに強く惹かれていたということになる。こうしたことから阿部は「経済史」を専門としながらも、リース、そして「元祖」ランケの方法を意識せざるを得なかったと思う。後にランケの『近世欧州史』を翻訳・出版したのもその表れと見る事が出来るように思う。もとより二人の間にこの点を巡って何か対立が生まれたわけではないようだ。阿部の死亡の知らせを聞いたリースは、「私は毎日の仕事にも手をつけることがほとんどできないありさまなのです。義理の息子がその義父であり以前の師でもある私より先に亡くなったなどということは、あまりにも通常の事態に反していますから、それだけに、私は悲しみも深く、昼も夜も彼のことと長ねえさんのことを考えずにはいられないのです」（金井・吉見 1978）、と書いている。義父のリースが亡くなったのは三年後の1928年12月のことであった。

阿部の後任は慶応の理財科を出た野村兼太郎（1896-1960）であった。野村は日本における社会経済史学の成立に尽力した最大の功労者の一人だが、福田との出会いについて「慶応義塾における最後の弟子」（野村1960）のなかで次のように記している。福田が慶応を辞めたのは大正7年（1918）3月のことだが、その頃彼は日本経済史と古代中世経済史を担当していた。「講義は決して面白いとはいえなかったが、いつも一抱の参考書を風呂敷につつんでもってこれられ、それをあちらこちらと参照しながら雄弁に話されるので、確かに若い学生には大きな刺激となった。しかし経済史は先生の得意の壇上ではなかった。その大部分は先生が以前に発表されたもの以上に出ることは殆どなかった。ただ古代中世経済史の講義の冒頭にヴィンデルバルトやリッケルトの歴史哲学を紹介されたのには、ちょっと驚かされたし、又意外にも思った。「先生は常に新しい学説を追求してやまない方であった。その頃西南ドイツ学派の哲学はまさに流行せんとしていた時で」、「その自然科学と文化科学との区別を黒板に図解しつつ、頗る簡明に説明され、ドイツ語を交えて学生を煙にまいたことを覚えている」。

福田が辞めた大正7年に理財科を卒業した野村は、大学の助手となり研究生生活に入るが、当初は経済哲学に強い関心を寄せていた。これは福田の講義の影響というよりも、「西南ドイツ学派の哲学」の流行にあるようだ。二年後には『経

済的文化と哲学』を上梓するほどの打ち込みようで、序の「真を求めて」に続いて、「科学としての経済学」「経済価値の研究」「歴史の経済的説明」「経済的文化の発展」「経済的文化の極致」の各篇は今読んでもさほど新鮮さを失っていない。だが彼は助手として阿部の指導下で経済史研究に打ち込むことになった。大正11年(1922)5月に母校からヨーロッパ留学を命ぜられて、イギリスへ向かった。当初はアシュリーの下で研鑽を意図していたが、彼にケンブリッジ大学のJ. H. クラップム教授の指導を勧められたという。

野村は三年間の留学について次のように総括している。「イギリスの学者のあまりに実用主義的な研究方法には飽き足らなく思いながらも、その実証的な態度には教えらるるところが多かった。事実を知るといことは歴史の根本的な要件である。しかし何が事実であるかを実証しようとすれば、該博な知識と鋭敏な洞察力と判断力とを必要とする。イギリス経済史の根本資料を考察するに際しても、その民族に関して十分な理解がなければ、満足すべき結論には到達し得ない。実証せんとして細部に進めば進むほど、言語の不足を感じる。一通りの意味は解っても、本当の意味は把握し得ない。結局懊悩しつつ月日を送ったに過ぎなかったが、概念的議論に対する疑惑は一層強くならざるを得なかった」(野村 1950)。大正14年3月に帰国した野村は、翌月から経済学部教授として「商業史」「経済学研究」などを担当することになった。彼の帰国の僅か二ヶ月前、科目の担当者で、彼の師でもあった阿部秀助が亡くなっていたからである。野村は暫くして日本経済史の方に比重を移しはじめるが、「三ヶ年間の留学の獲物を曲りなりにも纏める」ことだけは果たさなければならない。こうして誕生したのが『英国資本主義成立史』(1928)であり、そしてアシュリーの名著『英国経済史及学説』(An Introduction to English Economic History and Theory. 1888-93)の翻訳(1932)であった。

以上のように野村と福田とは年が離れているせいもあってか、直接的な関係は薄かった。「福田先生は逸話の多い方であった。いろいろ面白い話を諸先輩から聞かされているが、私に関する限りは、単なる師弟としての淡々たる交際に過ぎなかった」。しかし私が今日経済史をやるようになった因縁には、福田先生が大

いに関係がある。大正11年に海外留学を命ぜられた時の私の専攻科目は、日本経済史と古代中世経済史とであったのである。もし福田先生が大正7年に塾をやめずに、晩年まで慶応の教壇に立って居られたら、私の専門も変わっていたかも知れない。野村は先の追悼文をこのように結んでいる。

結びに代えて

日本における欧州経済史学の形成にあつては、以上のように東京商科大学と慶応義塾における「福田学派」あるいは彼の人脉が果たした役割は小さくなかった。福田の影響をヌキにして大正期の斯学の歩みについて語ることは出来ないとも言えるのである。小稿ではこれまでほとんど取り上げられることのなかった阿部秀助についてやや詳しく紹介したが、その他にも「欧州経済史学」に従事していたものもいた。特に東京商科大学には福田と交叉しながらも、彼と同世代の三浦新七(1877-1947)から村松恒一郎、上原専禄に引き継がれるもうひとつの流れがあった。特に上原の中世社会経済史料の分析は日本における研究水準を大きく引き上げるものであったことは、すでに周知のところである。欧州経済史学は、以上のように昭和5年(1930)における専門学会の設立という形で定着する前に、かなりの蓄積を重ねていたのである(土肥 2002)。小稿においては行論の必要上簡単な年譜や関連するエピソードなども組み込んだために、概括的にならざるを得なかった。問題史的な考察については機会を改めることにしたい。

「参考文献」

- 福田徳三(1904)『日本経済史論』坂西由蔵訳
セリグマン(1905)『新史観 歴史の経済的説明』河上肇訳
阿部秀助(1920?)『近世商業史』
上田貞次郎(1923,1979)『英国産業革命史論』講談社学術文庫
———(1930)「二十八年前の福田先生」『如水会会報』
高木壽一(1925)、「阿部秀助先生の学究的生涯」『三田学会雑誌』19-2
坂西由蔵(1925)『経済生活の歴史的考察』
———(1933)「中世ヨーロッパ経済史」改造社経済学全集『世界経済史』
野村兼太郎(1928)「Sir William Ashley を憶ふ」『三田学会雑誌』22-3

- (1950)『日本社会経済史』ダイヤモンド社
- (1960)「慶応義塾における最後の弟子」『福田徳三先生の追憶』
- アシュレー (1939)『英国経済組織の史的考察』改訂増補版 徳増栄太郎訳
- 山中謙二 (1932)「明治30年以後の西洋史」『歴史教育』7-9
- 宮下孝吉 (1960)「戦々競々」『福田徳三先生の追憶』
- 高村象平 (1960)「西洋社会経済史学・概観」『社会経済史体系』第十巻 弘文堂
- 山中篤太郎 (1965)「上田貞次郎」『一橋論叢』53-4
- 金井圓, 吉見周子編著 (1978)『わが父はお雇い外国人』合同出版
- 西川俊作 (1983)「G. ドロップァーズの履歴と業績」『三田商学研究』26-1
- (1990)「理財科の30年: 1890-1920年」『三田学会雑誌』83-3
- アードム・パークス (1990)「西洋から日本へお雇い外国人」アードム・パークス編, 梅溪昇監訳『近代化の推進者たち—留学生・お雇い外国人と明治—』思文閣出版
- 西沢保 (1991)「反徒, アウトサイダー, 経済史家たち」草光, 他編『英国を見る』リプロポート
- (2002)「上田貞次郎の新自由主義・日本経済論」都築, 他編『日英交流史1600-2000』⑤社会・文化 東京大学出版会
- 田中敏弘 (1993)「アメリカ制度派経済学とドイツ歴史学派」『アメリカ経済学史研究』晃洋書房
- ユルゲン・コッカ (2000)『社会史とは何か』仲内・土井訳 日本経済評論社
- 土肥恒之 (2001)「社会経済史学の萌芽と挫折」山田・徳永編『社会経済史学の誕生と黒正蔵』思文閣
- (2002)「『欧州経済史』の成立」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣
- 西川洋一 (2002)「ベルリン国立図書館所蔵ルートヴィヒ・リース書簡について」『国家学会雑誌』115-3/4
- (2003)「東京とベルリンにおけるルートヴィヒ・リース」東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社
- (一橋大学大学院社会学研究科教授)